

ディアコニー

ドイツ・キリスト教社会福祉の歴史

「ディアコニーと近代における内国伝道の歴史」
エーリヒ・バイロイター著 山城 順 訳



凡例

- 1, 本書はGESCHICHTE DER DIAKONIE UND INNER MISSION IN DER NEUZEIT, Erich Beyreuther, Dritte, erweiterte Auflage, 1983, C.Z.V. Verlag, Berlin, の翻訳である。
- 2, 強調語はゴチックで、イタリックは斜字体とした。
- 3, 本文中の()は原著者による。
- 4, []内は原文の語または訳者が必要と思った説明を加えた。とりわけ差別語、不快語とされる言葉の原語を示した。下女、下郎、異教徒、精神薄弱、白痴、狂人、奇形の子等。
5. 本書のなかにてでくる主な場所を示す「ドイツ福祉地図」を最初に示した。
6. 一般に聞きなれない言葉にふりかなをつけた。
7. 領邦教会[Landeskirche]はビスマルクによる帝国以降「州」教会と訳した
8. 巻末に著者紹介と本書のための豆辞典をつけた。

目次

序

第3版の序

第1章 近代の始めにいたるまでのキリスト教ディアコニー事業 1

- A. 古代のキリスト教ディアコニー
 - 1. 古代教会のディアコニー奉仕
使徒時代と使徒後の時代 2
 - 2. 2世紀と3世紀の初期カトリック教会 3
 - 3. 4世紀の帝国教会 6
 - 4. 5世紀の民族移動の嵐の中の教会 9
- B. 中世のキリスト教ディアコニー 11
 - 1. ゲルマンの領邦教会の国土でのディアコニー活動 11
 - 2. 中世盛期の修道院ディアコニーと信徒のディアコニー 13
 - 3. 中世末期の都市のディアコニー 15
 - 4. 中世末期のディアコニーの情景 16
- C. ドイツ宗教改革のディアコニー 17
 - 1. ルター派 17
 - 2. 改革された世界、ツヴィングリ - ヴッツァー - カルヴィン -
エムデンの難民共同体 - オランダ教会ディアコニー 21

第2章 敬虔主義の先駆者

シュペーナー - アウグスト・ヘルマン・フランケ -

ツィンツェンドルフ - 啓蒙主義社会の慈善事業 24

- 1. 30年戦争 - 著しい身分格差の起こり - 信心が与えた衝撃 24
- 2. 敬虔主義の父、シュペーナー - シュペーナーの社会批判と
社会福祉政策 - 公共の貧民援助の復活 - ベルリンの救貧院 26
- 3. アウグスト・ヘルマン・フランケ - キリスト教施設ディアコニーの
新時代 - ハレの孤児院 - 信仰の業 - 模範的な衛生学 - 寄付する喜び 28
- 4. 伝道的, 教育的, 社会福祉の目標をもつディアコニーの出発 -
信仰教育 - ハレの教育は世界教会との関係を結ぶ 31
- 5. 公共生活と社会生活の改造を目指す覚醒したキリスト教徒に

よる宗教改革の全体 34

6. ツィンツェンドルフと兄弟団 - ディアコニー活動をする教会のモデル - 宣教奉仕 - 共同体にふさわしいこと - 兄弟団 38
7. ベツレヘム - アメリカにおける「共産主義的」ヘルンフォートの開拓地 - 自発的精神と喜び 41
8. 物乞い - 飢饉 - 18世紀末の伝染病 - 啓蒙主義社会の人道的な慈善活動 - 新たな衰退 - 永続的な功績 43

第3章 信仰覚醒運動内の先駆者，児童救護活動

47

1. ディアコニーと19世紀の内国伝道の母体としての信仰覚醒運動 - ドイツ・キリスト教協会 - J.A. ウルルシュベルガー - シュタインコップとヨーロッパ聖書協会の創立 47
2. 聖書の現実主義 - オペリン - 幼稚園の父 - 「キリスト教産業」Ph.M. ハーン - G.A. ヴェルナー 48
3. 南ドイツ救護施設運動 - ボイゲンの独房 - 貧民学校教師の施設 - キリスト教教育 51
4. ワイマールのJ.D. ファルク - ラインラントのアーダルベルト・フォン・デア・レッケ - フォルマルシュタイン伯爵 54
5. 結び - 青年への奉仕 - 幼稚園活動 - 家事と教育事業 - キリスト教教育思想 56

第4章 慈善事業における女性の参加

テーオドア・フリードナーとヴィルヘルム・レーエ

57

1. 前提 女性がもっている信心の発見-協力の準備 - 協会の形での活動の可能性 57
2. 女性の先駆者 - エリザス・フライ - アマリエ・ジーヴェキング 58
3. 女性ディアコニーの先駆者、カイザースヴェルトのテーオドール・フリードナー，教会共同体をめぐる彼女たちの戦い - オランダとイギリスの大きな予備学校 59
4. フリードナーの故郷での最初の事業：釈放女囚救護所 - 編物学校 - 幼稚園 - 福音主義保母養成学校 - 最初のディアコニッセによる病人看護の暗い時代の清算 62
5. 母の家ディアコニーの創設 - フリーデリケ・フリードナー、ディアコニッセの最初の責任者 - 根本的批判 -

- フリーデリケ・フリードナーの帰天 64
6. 信頼できる基礎の拡張 - カロリン・フリードナー
- 教師と子どものディアコニー - 教会に対する立場 68
 7. ディアコニッセの家 - カイザースヴェルトと並ぶ特徴 - フローレンス
・ ナティンゲールとイギリス - ベルリン王家の施設 71
 8. フリードナーの東洋ディアコニー - 第1回カイザースヴェルト
の母の家の総会 - フリードナーの帰天 73
 9. ノイエンデッテルスアウのヴィルヘルム・レーエ、ルター教会
ディアコニッセの父 - 恒常的でない一時的な母の家 75
 10. シュヴェスター第2世代 - 戦争出動 - 新しい刺激 -
フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンク -
エヴァ・フォン・ティレ・ヴィンクラウ 79
 11. 世紀の変わり目 - 危機の時代 - 自由シュヴェスター -
福祉事業女学生 - ディアコニー協会 82
 12. 共同体ディアコニー - 自由教会ディアコニー - 宣教的な新しい調整 -
ヘルマン・ベッツェル - 被造物の損傷 - テーオドーア・ツェクラウ
とスタニスラウの施設 85
 13. 回顧と展望 89

第5章 ヨーハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルンと内国伝道の古典時代 90

1. ヨーハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルンの永続的な意味 90
2. ヨーハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルン、1833年の
ラウエスハウス創設に至るまでの発展 91
3. 1833年ハンブルクでのラウエスハウス創設とその始めの歴史 95
4. 1848年以前、ハンブルクからのヴィヘルンの進撃と活動の拡張 100
5. ヴィヘルンと同時代の人たちの革命前の不安 106
6. 1848年の革命の年とヴィッテンベルク教会大会 110
7. ヨーロッパにおける幻が問題なのか？
ヴィヘルンによるヴィッテンベルク教会大会の誤った分析 114
8. 社会問題解決のためのヴィヘルンの3重の道：国の広範な社会福祉課題
同胞の隣人救助 - 困窮者の自助 - 社会問題と福音伝道 117
9. 1849年からのヴィヘルンの指揮下の内国伝道中央委員会活動 120
10. 教会ディアコニーのヴィヘルンプランとその運命 124
11. ヴィヘルンのプロイセン官職加入 - 挫折した監獄改革 -

| | |
|----------------------------|-----|
| 中央委員会大会での社会問題 - ヴィヘルンの病氣と死 | 128 |
| 12. ヴィヘルンの遺産 | 132 |

第6章 ビスマルクの時代と1914年までの帝国における ディアコニーと内国伝道 134

1. ビスマルク時代、ヴィヘルン辞任後の中央委員会 - 規則改正 - 社会主義者鎮圧法と社会改革 - 福音伝道運動 - 移民の困窮 134
2. フリードリヒ・フォン・ボーデルシュヴィンク (1831-1910) てんかん病患者と貧困放浪者の父 - 政策の道 - 労働者住宅 151
3. アドルフ・シュテッカーと反教會的ベルリンをめぐる闘い - 宮廷説教師 - 自由国民教會のために - ベルリン都市伝道 - 皇帝の不興 - ボーデルシュヴィンクとの変わらない友情 164
4. キリスト教社会福祉をめぐる人たちの輪 - 世紀の変わり目 - 福音主義社会福祉協議会 - 福音主義労働運動
フリードリヒ・ナウマン - カトリックの社会福祉教説 187
5. 第1次世界大戦にいたるまでの内国伝道の発展
福祉活動 - 単独事業 - ドイツディアコニー制度の歴史と意味
社会福祉学校と福音主義女性救援 - 公共福祉 195

第7章 2つの世界戦争の間の 内国伝道とディアコニー (1914-1945) 205

1. 第1次世界大戦中の内国伝道 205
2. ワイマール共和国時代(1918-1933) - 福祉国家の福祉業務
- 議会 - 国民伝道 - デバハイムの破産と教會の救援 207
3. 1933年と1945年の闘争の時代 - 内国伝道の計画的な排除 - 成長する抵抗運動 - 教會の譲れない事業としての内国伝道 - 「安樂死」組織 - 崩壊に至るまでの沈黙の奉仕 216

第8章 第2次世界大戦後の内国伝道 224

1. ばらばらになった世界 - 内国伝道の妨げられない活動 - ボランティアの協力 - 最初に集まった男女 224
2. 再建の時代 - 希望のシグナル - 鉄道伝道と都市伝道 - 教會共同体の訴え 232

3. 内国伝道中央委員会の活動再開 - 社会福祉前衛連盟共同事業体 -
管理委員会規則第 22 号に反対する抵抗 237

第 9 章 1945 年から 1957 年のドイツ福音主義教会救援事業 240

1. ドイツ崩壊前史 - 抵抗運動と救援事業 - ハンス・シェーン
フェルト - オイゲン・ゲルステンマイアー 240
2. 「ドイツ福音主義教会救援事業」の創設 - 最初の
協力者、男性社会 - 組織再建 - 「ヴィヘルン 2 世」 - 西と東 244
3. 30 ヶ国からの世界教会救援 - 世界教会協議会 -
教会再建 - 多くの救援成果 248
4. 経済の奇跡とディアコニー - エスペルカンブ - ゲルステン
マイアーの救援事業からの離脱 - ドイツの教会による最初の世界教会
援助 - 東ドイツにおける内国伝道を評価する - 社会の変化 254

**第 10 章 1957 年と 1982 年間のドイツ福音主義教会の
ディアコニー事業とその世界教会奉仕 264**

1. 2 つの大きな慈善事業の共同 - 内国伝道と救援事業の合併 -
テオドーア・ショーバー - シュトゥットガルト・ディアコ
ニー事業団専門分野 - 伝道の広がり 264
2. ディアコニー職員 統計上の事か? - 大企業としての
ディアコニー組織 - 神学と教会の衰弱 268
3. 幻想ぬきのディアコニー - ディアコニーの自由な領域 - 成長
していく社会福祉業務 - 世俗領域のなかでの自助の発見 - 重点計画 272
4. 世界教会ディアコニーの兆しの中で - ドイツのための世界教会援助の
完結 - 「世界の人にパンを」行動 - 災害救援 - 教会の奉仕の展開 -
海外奉仕 - 世界教会の協力 277

補足 282

| | |
|--------|-----|
| 注 | 283 |
| 人名索引 | 334 |
| 事項索引 | 338 |
| 豆辞典 | 344 |
| 訳者あとがき | 346 |

序

今日の福音主義キリスト教慈善活動は2重の面から描かれる。それは、歴史的経過において、共同体とそこに属する全ての人々のなかで、教会全体にどんなに活性化を迫っていたかを忘れることはできない。効果的で組織的な奉仕の受け入れは、個々の教会共同体の中にといたるまで、ヨーハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルンまたヴィルヘルム・レーエなどの努力によるものである。一般に[国民全体に平等に課せられる]奉仕義務とキリスト教信者個々の愛の力とは、活気に満ちたものとならねばならない。

他方、教会はその中に多様な構造を与え、内国伝道が同じように分裂した社会にディアコニー業務をやめてしまったり、半分ぐらいを行ったり、または始めようとする活動をできないわけではないことが、容易にわかってきている。ここに「モデル」が生まれ、ここで狭苦しい教会の職務ではない - 彼らとその開拓的な奉仕の自発性と、着想の天賦の才と、また伝わって心を奪うような援助意志の根底にあるものを発揮することができた、創造的で霊的な人たちのために更なる領域があつて、ここで徐々に、年々100人、そう1,000人の青年男女によって - 驚くべき生の変化の広がり - にふさわしい - さまざまな奉仕の形態が、模範的なものとなった。その時、彼らは自分を開放する内的故郷を見出した。

その時、十分期待できる真のディアコニーの試みを共同体自身の中で開始するものから、目を離さないように、重点は内国伝道の歴史的発展の記述となる。教会はそれと同じようにここでも霊的な力を示してきた。その場合、19世紀のドイツ・キリスト教の全面的拒絶も考慮に入れ、悩まされた社会的・国家的問題も公にされる。困窮と苦悩に対する - この最前列で、教会の力と無力が同時に明らかにされる。

いま私たちに求められた奉仕の思慮分別と準備のすべては - 前世紀の青年男女が愛の奉仕の中で何を考え、行い、そして感じたか - そのすべてを知っているわけではないが、絶えざる歴史的回顧を必要とす

る。私たちは現在へと発展する太い線を知ろうとしている。

その時、私たちは近代の慈善活動の多様に分岐した豊かな歴史の中に、すべて固有のニュアンスをつけて理解しようとするのは、おそらく特にしなくてもよいと思う。男性のディアコニーに関しては、女性についてしてきたように、特別な1章が書かれるべきである。女性ディアコニーのために、- 男性ディアコニーのためにはまだ書かれていない - 最初の要約した叙述をもっている。それは確かに苦勞の多い叙述であり、慈善活動の歴史全体の中で理解される。一方女性の協力は特別に固有な形態と独立を持っている。福音主義の慈善活動への女性の加入は、福音主義キリスト教の世界全体に対して、根本的な意味を与えてきた。

なお、私たちは、その中で人的に関わってきた20世紀の近年の出来事について必要な歴史的距離をおいて見ることが全くできていない。だが、ここですべての準備を行うとき、自らを正し、正確な歴史を記述し、それを評価することもあえてしなければならない。

私たちは、個々の事業の歴史、ディアコニーの家、ディアコニー施設、養成所の聖書教室、それぞれ祝福に満ちた福音主義慈善活動のすべての焦点が、全教会と地域に何を意味しているかを理解して叙述することを願い、実際には、混乱に満ちたところでは何も出来ないために、後退すべきことも、ご理解いただきたい。

私たちはこのような限定をし、概観的に記述した小さな領域についても、それはしばしば将来の課題に光を投げかけているので、直接に道の交差点に立っていて、無視することはできない。

ミュンヘン 1962年春

エーリヒ・バイロイター

第3版の序

1945年までのディアコニーの歴史と内国伝道の歴史について記述した第1版と第2版の序は変更されない。私たちはそこに立っている。両者は、何が過去と結びついて連続するのかを語っている。

出版された第3版の中で、私たちは最後の3章を色あせそうになっている最近の現代史に費やした。

1945年が実際に終わった時、続く38年間という短期間に - ディアコニーの事業で従業員が3千600人から2万4千人以上に増加するという - 上昇が起こると予想する人はいなかった。カリタスとあわせると、2つの大きな慈善事業の中で50万人以上の人々が、その奉仕業務についている。

その新しい興奮するような歴史が1982年にすでに終わろうとしている今、それが冒険であり続けていることを私たちは知っている。だがこの2世紀の間ディアコニー自身は世界的に広まったエキュメニカルな[世界教会]運動の中で変わり、この世のキリスト教の中で成長し、その限界を砕き、公衆の中で驚くべき、永続的な広い同意を得ている。私たちは再び、昔のように現代の十字路に立っている。その中にディアコニー事業が織り込まれている西側世界は、それらを変える力を持っているのかどうか。またその線を手探りしてさがし、積極的な援助をしようとする意識の変化のただ中で、新しい道しるべを設定出来るかどうかということ、あまりにも早く変化してしまった不安な世界に証明してきた。

1983年夏

エーリヒ・バイロイター